愛しさ故に　～El paradero de la princesa～

愛埜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛しさ故に　～Ｅｌ　ｐａｒａｄｅｒｏ　ｄｅ　ｌａ　ｐｒｉｎｃｅｓａ～

【Ｎコード】
Ｎ２０５１Ｐ

【作者名】
愛埜

【あらすじ】
尸魂界は平穏な日々を取り戻した。　しかし、あの事件以来、姿を見せていない者が。　一体、何処に行ったのか？何があったのだろうか…？　実は君の横に・・・。
※檜佐木修兵と綾瀬川弓親との絡みが多いです。　そんなのは嫌いだ！っと云う方は読まない事をお勧めします。
“愛しさ故に”シリーズ第二弾となります。　前作同様に捏造あり、原作と異なる点ありです。

≪1≫ Soy pat?tico

自分が前を向いて歩いてきたのは君が居たから。　此処に居ることが出来たのも君が居たから。

君の隣が僕の居場所だった。
だから、僕は君の美学に背かないようにして、今まで君の後ろを着いて歩いてきた。
僕の居場所を失わないように。

君の美学に逸れている今の僕に、君の後ろを歩く権利はない。

居場所がなくなった気がした。
怖い。
恐怖が身を包む。
いつまで偽っていられるだろうか。
時間は長くはない。
怖い。

これから僕は、一体どうやって歩いていけばいいのだろう。

≪1≫　Soy　pat?tico（後書き）

前作から引き続きの方も、はじめましての方も、よろしくお願いします。　こんな私の文章たちですが、読んでやってください。

≪2≫ Una nueva apertura

欠伸を殺しながら一番隊舎に向かっている男が1人。
九番隊、副隊長の檜佐木修兵だ。
総隊長である山本元柳斎重國による呼び出しの為、一番隊へと向かっている。
修兵は朝が早いので、音を出来るだけたてないようにして歩いていた。
目的地に着く。

トントントン

「九番隊、副隊長の檜佐木修兵です。」
「どうぞ」

中からは一番隊、副隊長である雀部長次郎の眠たそうな声が。
やはり彼にとっても、この時間は早いだろう。
日が昇ってくる気配は、まだまだない。
案内されて修兵が中に入ると、そこには総隊長の姿が。
数歩進んで、片膝をつき首(こうべ)をたれる。

「お呼びでしょうか」
「うむ。　檜佐木副隊長、顔を見せよ」
「はい」

修兵は顔を上げる。　すると、総隊長と目が合った。
総隊長は、長い髭を撫でながら話し始めた。

「こんな朝早くにすまんのぉ。　本日、お主(ぬし)を呼んだのは、今か

らする話を他の誰にも聞かれたくなかったからじゃ」
雀部副隊長はその言葉を聞き、退出する。
それを確認してから、総隊長は言葉を続けた。
「単刀直入に申そう。　とある者を九番隊の隊長に据えたいと思おておる。」
修兵は目を見張る。　あまりにも急な話だ。
普通なら、どこかから情報が漏れる。　そして、何の根拠もない噂となって広まる。
それが今のところ一切ない。
「…それは一体、誰ですか」
「受け入れてくれるかの」
総隊長の願いは、柔らかく言っているだけ。　その本質は命令だ。
誰も断われるはずがない。
修兵が返事をする間もなく、総隊長は話を続ける。
「…誰かは自分の目で確かめよ。　期限は明日の昼までじゃ。
明日の昼に隊主会を行う。　その時に九番隊隊長が来ていなければ、この話はなかった事にする。」
「わかりました。」
「これは護廷十三隊の、何よりも九番隊の未来(あす)を左右することじゃ。　皆でよく検討せよ。」
そう言って、総隊長は修兵に封筒を差し出す。
「この中に九番隊の隊長候補の者の資料が入っておる。　今、少

し見てみよ。」
「はい」
修兵は封筒を受け取り、中身を取り出す。
一枚の紙が入っていた。
修兵は直ぐに変な点を見つける。
「…？」
「偶々中を見た者に知られたくなかったのでの。　そこにヒントを記しておいた。　お主なら、誰の事かは直ぐに判るはずじゃ。」
「・・・一つだけ質問してもよろしいでしょうか」
修兵が資料から目を外し総隊長を見る。
聞きたい事はたくさんあるが、今はコレだけを聞いておく。
「三番隊、五番隊、九番隊。　隊長が不在の隊は現在３つ。　なぜ九番隊なのですか？」
この３つの中で一番不安定なのは五番隊だ。
「なぜだと思う。　檜佐木副隊長」
「・・・３つの中で一番不安定なのは五番隊です。」
修兵は少しずつ言葉を紡いでいく。
「そこを安定させる事が尸魂界にとって最短の道です。　ですが…」
総隊長は黙って聞いている。

「副隊長の雛森は未だに傷が癒えていません。」

彼女の負った体の傷は完治した。
だが、心の傷は深い。　癒えていない。

「そのような中、新たに隊長を据えるのは逆効果になるでしょう。・・・・。」

修兵は一生懸命に話しているが、まだ答えは見付かっていないようだ。

「そこまで判っているのなら今は十分じゃ」

総隊長が話を止める。

「新たな隊長となる者と対面すれば、おのずと判るであろう。では良い返事を期待する。」

「失礼しました。」

修兵は頭を深く下げると、部屋を退出した。
不可思議な紙が入れられた封筒を持って。

総隊長1人が部屋に残される。

「反発もあるやもしれぬ。　じゃが・・・あの者ならば必ず九番隊を始めとして、瀞霊廷内を良い方向へと引っ掻き回してくれるはずじゃ」

期待を胸に総隊長は青い空を見る。
日が、やっと昇り始めた。

≪3≫ Una llave

修兵は隊舎に戻り、隊主室で隊の仕事をこなす。　そして、もう一度資料を見た。
初めは何かの間違いかと思われた。
だが、さっきの総隊長の言葉から判断して、決して間違いではいないのだろう。
そこに記されていたのは、たった一行。

九番隊、隊首室、棚の左上端

まずは、書かれていた通りに棚の左端を調べる。
そこには渡された封筒よりも、少し大きい白い封筒が見つかった。
修兵は、さっそく中を調べる。
一枚の紙が入っていた。
そこに記されていた内容とは・・・

？　その者は卍解を習得している

隊長になろうと云うのだから当然だろう。　一部の例外を除いてだが。
そして、その裏に何か記されている。

九番隊、会議室、北東の机の上

どうやら、紙に記されている通りに動いていくしかなさそうだ。

「総隊長は遊んでんじゃねぇよな・・・」

修兵に一抹の不安がよぎる。
だが、そんな事も言っていられない。　こうしている間も、時刻は無情にも流れていく。
修兵は棚から離れ、会議室へと向かった。　久しぶりに会議室へと入る。
早速、机を調べる。
あった。
今度は封筒に入っていない。　文鎮で抑えつけられているだけだ。

？　その者は他隊の死神である

すなわち、九番隊の者ではないという事だ。
一体、何処の隊からなのだろうか。　どの隊も、上位席官を他所の隊へ送れるほどの余裕はないはずだ。
かといって、九番隊で？に当てはまる者を思いつかない。
修兵はすぐに紙を裏返す。

九番隊、修錬場、副隊長の木札

それを見ると、すぐに修錬場へと向かう。
皆が練習している中を修兵は気にも留めずに、皆の木の名札が掛けられている壁に向かって進んでいく。

「副隊長、どうなさいましたか？」

そんな修兵に声をかけてきたのは、三席の白雲航平（しらくもこうへい）だ。

「・・・総隊長から」

そう言いながら、白雲を見ずに修兵は自分の名札を外す。　紙が一

枚を落ちた。
紙の内容が皆に見えないようにして、すかさず拾う。

？　その者は九番隊、副隊長と初対面ではない

紙を見た修兵の表情が険しくなる。
新たな紙を見つけるたびに手がかりが増えていっているはずなのに、
全く近づいているような気がしない。

「はぁ～・・・」
「副隊長？」

不思議そうな白雲の声に修兵が振りかえると、この場に居る皆が修兵を見ていた。
皆の表情はどこか不安そうだ。

「一体、どうなさったのですか？」
「…総隊長に朝呼び出された。　それで少しな」

こんな簡単な説明では皆は納得しない。　そして、修兵から目を離そうとしない。
しかし、気にせず言葉を続ける。

「白雲、すぐに隊首室に来い。　話がある。」
「分かりました。　この事ですか？」
「・・そうだ。」

そう言うと修兵は修錬場を出て行ってしまった。
白雲もその後に続いて出て行こうとする。

「三席。　何か深刻な事でも・・・？　まさか、」
白雲に声をかけたのは、四席の千田明衣（せんだめい）だ。
彼女の赤い金色の髪が朝日を反射して眩しい。
「皆が心配する様な事じゃないと思うよ。」
少し暗い表情の皆に、白雲は明るい声で言う。
こういう時、皆に笑顔を与えるのが白雲の仕事の一部だ。
「ちゃんと副隊長は名札を元の位置に戻しているし。」
「ですが・・・」
もし、名札が外されたら、それは他隊への異動だ。
しかも、それは決定が下った証拠だ。　もう異議は認められない。
「大丈夫、大丈夫。　そんな深刻な顔をするんじゃないよ、千田。」
「そう願っております。」
不安そうな皆を修錬場に残して、白雲は隊首室へと向かった。

≪4≫　Qui?n

誰もいない隊首室は暗い。
扉を開けたまま、修兵は修錬場で見つけた紙の裏を見る。

十番隊、隊首室、花瓶の下

書かれた文言に従って、今まで動いてきた。　次は他隊の隊首室だ。
面倒だ。

「副隊長。　明かりくらい点けて下さい。」

言いながら明かりを点けたのは白雲だ。

「何で呼び出されたのですか？　さっきのような中途半端な言い方は、隊士の士気を下げる原因になりますよ。」
「悪かった」
「本当にそう思ってますよね・・・？　皆、副隊長の事が心配なんです。」
「？」
「倒れないで下さいね。　・・・突然、居なくなったりしないで下さい。」

その言葉を聞いた途端、修兵は驚きの表情になった。
しかし、すぐに、はにかむ。
隊士からそのような心配を受けると云う事は、皆から必要とされている証拠だ。

「約束する。」

修兵はテレを隠しながら座り、白雲にも座るように促す。
白雲が座ったのを確認してから、修兵は話出す。

「本題だ。」
「はい」

まだ、誰かも分かっていない。
そして、時間もない。
だが、九番隊の三席である白雲には不確定な事でも伝えておく必要がある。

「朝、総隊長から呼び出しがあった。　・・・新たな九番隊の隊長についてだ。」
「っ！！」

思いもしない内容だったのだろう。
白雲の表情が固まる。　声も堅くなった。

「一体、どなたなのですか・・・？」
「…誰なのかは自分の目で確かめろだってよ。　今ある手がかりから、誰なのかを割り出さなければならない。　手掛かりはこれらだ。」
「・・それで、修錬場に？」
「そうだ。　・・・あと、」

修兵は言葉に詰まる。

「あと？」
「その者を新たな隊長に迎え入れるかは、九番隊全員で…」

「まさか、全員で決めるんですか？」
「そうだ。　受け入れるのであれば、明日の隊首会に出席させろだと」
この様な決め方は異例だ。
護廷に来て永くなる修兵や白雲でも、今回の例は初めて聞く。
「・・・どうするのですか。　時間も余りありませんね。」
「まずは誰なのかを即刻割り出し、夕方までに皆に話す。　その時に、受け入れるかを審議する。」
言いながら修兵は今まで見つけた紙を持って立ち上がる。
見上げてくる白雲の表情はもう、いつもの通りだ。
「わかりました。　・・・、副隊長。」
「何だ」
「どのような事であろうと、副隊長の意思に従います。」
「ありがとう」
修兵は十番隊へ向かって、隊首室を出た。

修兵は十番隊に到着した。
だが、何と言って行けばよいのだろうか。　修兵が詳しい事を話す事は、まだ許されていない。
「こんな所で、どうしたんだ？」
「日番谷隊長っ！」

修兵の後ろには十番隊の隊長、日番谷冬獅郎が。
不思議そうな表情で修兵を見上げている。

「これですよ。」

そう言いながら、先ほど見つけた紙を一枚だけ見せる。

「何だ？」
「総隊長に試されているというか・・・」
「遊ばれているのか？」

皆、この状況を見て、遊ばれているようにしか思わないようだ。
真意を知っている者でも、そう云う風に考えてしまっているのだから、仕方がないだろうが。

「場所だな。　ウチじゃないか、それで来たのか？」
「…はい」
「ついて来い」
「有り難うございます。」

修兵は日番谷の後を大人しくついていく。

「ここだ。　着いたぞ」
「失礼します」

其処は十番隊の隊首室前。
修兵は真っ先に目に飛び込んできた花瓶の元へと寄る。
目当てのものは下敷きにされていた。

「？　こんなもの、さっきは無かったぞ」

「そうなんっすか？」

そう言われれば、どこでも必ずタイミングを見計らったかのように紙がある。

「総隊長に試されているって何なんだ？」

「詳しい事は言うなと。」

「そうか。　…あ。」

修兵の困った表情を見て日番谷は何かを思い出したようだ。

「もうすぐ、松本が帰って来る。　その前に行け。　ややこしい事になるぞ。」

「ありがとうございました。」

修兵は、気のきく十番隊の隊長に一礼してから、自隊へと戻って行った。

≪5≫　Recojo

十番隊で見つけた紙は、丁寧に封筒に入れられていた。
わざわざ宛名まで書いてある。　間違って他人に中を見られる事を防ぐためだろう。
九番隊へと戻った修兵は隊首室に戻り、ソファに座る。
早速、封筒の中身を広げる。
いままでより少し大きい紙が出てきた。
そこに書いてある事は…。

？　その者と九番隊、副隊長は剣を交えた事がある
？　その者は最近、変貌した

今までに見つかったのと、これを共に見比べる。
？～？については修兵絡みだ。
次に裏を見てみる。　そこには何時も通り、一行。

隣の隣、副官補佐の隣に立ちし輩

今度は場所ではない。
おそらく、この者が新しい隊長候補と云ったところだろうか。
では、全ての手がかりを集め終えたという事になる。
修兵は思わず机に肘をつき、頭を抱える。

「誰だってんだよ・・・。」
「・・ちょ。　副隊長っ！！」
「うわ！」

驚きのあまり、修兵は椅子から落ちそうになる。

そして、急いで座りなおして前を見た。

「驚かせるなよ…」

そこには、声をかけてきた者が。

「俺は何度も呼びましたよ。　・・・お疲れなのでしたら休憩なさって下さい。」

「悪かった。　大丈夫だ。」

九番隊、第十六席の足立杜真だ。

赤茶色の髪が太陽を反射して眩しい。

「要件は何だ？」

「ああ、すっかり忘れる所でした。」

そう言いながら、杜真は数枚の紙を差し出してきた。

「九番隊のが十三番隊に混じってたらしいです。」

「十三番隊に？」

「はい。　・・・・・どうにか成らないんですか？」

「仕方ねーだろ。　これもついでに頼む。」

「やっぱりありましたか。　こういう予想は当たるのですけどね。」

「処理しておいてくれ。」

「了解しました。　…副隊長、これは何ですか？」

言いながら、杜真は先程、修兵が見ていた資料を指して言う。

修兵はそれを差し出しながら言う。

「総隊長からだ。　誰なのか考えろだとよ」
「失礼します。　・・・何ですか、これ。」
言いながら杜真は資料をよく見る。
「副隊長じゃないと分からないじゃないですか！？」
「あぁ。　でも判らねぇ」
修兵は頭を抱える。
こうしている間にもタイムリミットは近付いてくる。
すっかり朝日は昇り、もうすぐで一巳の刻（午前十時頃）だ。
「？と？に当てはまるのは、そんなに居ないんじゃあ・・・」
「？はそうだな。　他隊の隊士は席官でないと面識がねぇ。　・・・？か」
「はい。　例えば、日番谷隊長だったらピッタリですよ。　少し身長が伸びられたって噂が…」
杜真は“少し”を強調して言う。
「・・・それ、日番谷隊長に絶対に言うなよ」
「？　どうしてですか？」
「氷像にされるぞ」
「うっ」
杜真の表情が凍りつく。
そして必死に取り繕おうとする。
「・・・でも、この感じ。　総隊長は遊んでおられるのでは？」

だが、言ってからすぐに何か思い出した様な表情に変わった。

「そう云えば、さっきのとは逆で、八番隊と十番隊と十一番隊の資料がウチに混じってました。」

「最近、本当に多いな」

「もう・・・。　どうにかして欲しいですよ・・・」

最近、九番隊には他隊の書類が混じっている事が増えた。
それを届けに行くのが面倒くさい。

「すぐに届けて来ます。」

「待て、俺が行く」

「？」

修兵が杜真を制する。
杜真は意図が読めず、キョトンとしている。　こういう事は普通、副隊長がする仕事ではない。

「ここにいても、一向に判りそうにないからな。」

「わかりました。　それじゃあ、他隊から返ってきたのは、こっちで終わらせておきます。」

「頼む」

そう言って、修兵は部屋を出ていった。
杜真はホッと一息つき、託された書類を持って隊主室を出た。

≪6≫ Lo busco

修兵はやっと十一番隊の隊舎に辿り着いた。
八番隊では副隊長の伊勢七緒に色々な愚痴を聞かされた。
そして十番隊では、隊長である日番谷の姿はもうなかった。　その代わりに居た、副隊長の松本乱菊に酒を勧められ・・・。
散々な目にあった修兵は、もっと早く此処に来るつもりだったのだ。
修兵は最終目的地である十一番隊の隊首室を、真っ直ぐ目指す。

トントントン

隊首室の前に着いて、すぐに扉を叩く。
修兵にとって、一瞬の時間でも今は惜しい。

「誰だ」
「九番隊、檜佐木修兵だ。」

扉が開けられる。
そこには紙の山と十一番隊、第三席の斑目一角の姿が。
扉を開けたのは見慣れない死神。　髪が非常に長く、俯いているので修兵からは表情が見えない。

「仕事、進んでないのかよ」

今にも崩れそうなくらいに高く積まれた紙の山を見て修兵が言う。

「あぁ？　邪魔しに来たのか」
「そんな訳ねーだろ。　これだ。」

そう言って修兵は、髪の長い死神に書類をさし渡す。

「九番隊に混じってたらしい」

髪の長い死神が受け取った一瞬、霊圧が揺れた。　その霊圧は、修兵の全く知らないものではない。

思わず、修兵は髪の長い死神を凝視してしまう。

「・・・もしかして、てめえは綾瀬川か？」

綾瀬川と呼ばれた死神は長い髪を掻き上げて、やっと修兵に顔を見せた。

「さすが檜佐木副隊長。　正解です。」

修兵が以前に会った時よりも数倍髪が長くなった、十一番隊、第五席の綾瀬川弓親がそう答えた。

纏っている雰囲気が・・・艶耀だ。

しかも、霊圧が大きくなっているのを抑えているように感じ取れる。

色々と変貌している。

「何かあったのか？」

「あぁ…、話せば長くなりますよ。」

「・・・弓親、話すなら外に行け」

「わかった」

十一番隊の三席と五席の会話は、以前と全く変りない。

「外に出るけど、構わないかい？」

「ああ」

扉を開けながらそう言われて、修兵は弓親と共に外へ出る。

「よかったのか？　手伝っていたんだろ？」

「構わないよ。　サボる口実が出来て、むしろ良かったくらい」

本当にそう思っているらしい弓親は、どんどん十一番隊の隊舎を離れて行く。

「どこまで行くつもりだ」

「これから話す事を聞かれたくないんだ。　・・・秘密にする事に決めたんだ。」

そう言う、弓親の声は何時もより少しだけ心持ち高い。

「・・・・君だけだよ。　僕が綾瀬川弓親だってすぐに判って言ったのは。」

斑目と話している時の弓親の表情を見たのは何とも思わなかったのだが、今の表情は少し曇っている。

そして、以前に2人で話した時よりも、どこか淋しそうな表情に、修兵には見えた。

≪7≫ Lo encuentro

どこか淋しそうな、悲しそうな表情だ。
いや、本当に寂しく、悲しいのだろう。

「この前の事件。」

弓親は、十一番隊の隊舎から遠ざかったコスモス畑まで来たところで、深呼吸をしてから話を始めた。

「宮田か」
「そう。　あれ以来、この姿なんだ。」

そう言って弓親は両手を広げる。　少し前よりも小柄になったように見える。
表情は依然として、暗いままだ。

「宮田曰く、“この姿が本来の姿、今までの姿が偽りの姿”」
「なぜ宮田が出てくる？」
「あっちで生きていた頃、僕たちは知り合いだったんだって…。
それで、故意に僕の霊圧をいじくってたらしい。　それで、蓋がかかった時に・・・」
「だから、今までと今は違う姿、か。」
「そういう事らしい。」
「それは本当に宮田か？　それ程の力量がある奴では無かったぞ。」
「ふふっ。　自分で選んだ席官に対して厳しいね。」
「真実を言っているだけだ。」

修兵にとって、宮田は自分の部下ではない。　だから、容赦なく言う。
修兵にとって、宮田は自分の部下であった。　だから、偽りなく言う。

「もし宮田で無いとしたら誰なんだろうね」
「自分じゃねぇのか」
「？」
「自己防衛だろ。　無意識に危機を察していたんじゃねーのか。
…話が少し逸れたな。」
「構わないよ・・・。」

何気ない会話。
話声だけを聞いていると、互いに何かを抱えているようには聴こえない。
弓親はゆっくりと息を吸う。

「・・十一番隊の隊士を含めて、ほとんど僕が綾瀬川弓親だと気付かなくって。　…どうせなら、皆に気づかれるまで黙ってようかと」

弓親が修兵に近づく。

「そして厄介な事に、変わったのは見た目だけじゃないんだ。　・・・つまり、髪が異常に伸びただけではないって事。」

言いながら弓親は修兵の左手を取り、少し不敵に笑う。

「君にだけ、特別に教えてあげよう。　・・・驚かすよ。」

急に修兵を引き寄せ、手を胸にそっと押しあてた。
男ならあり得ない。
柔らかな触感が修兵の左手に。

「っ！！」

直後、勢い余って弓親は後ろへ倒れそうになった。
修兵は咄嗟に弓親を引き寄せ、倒れるのを防ぐ。　間近で、２人の目が合う。

「・・・。」
「ありがとうございます。」

２人は同時にお互いから、ほんの少しだけ離れる。
気まずい。

「・・・倒れそうになったのは計算外だったなぁ」

弓親は悔しそうな表情で、ゴメンね、と言いながら修兵から、もう少しだけ離れる。
目を合わせていなかった２人は、目を合わせる。

「ふふっ、可っ愛い。　真っ赤ですよ、檜佐木副隊長。」
「なっ、てめえっ！」

一瞬、弓親の顔に笑顔が。　しかし、すぐに元に戻る。
白とピンクのコスモスが風に揺れる。
弓親とは対照的に、…まるで笑っているように。
日は昇り、もう南中する時刻を過ぎてしまった。

「この事は他言しちゃぁいけないよ。　秘密だからね。　・・あーあ」

弓親が視線をコスモスにやる。

「今考えると、これで君は僕の秘密を2つ知った事になったよね。…まぁ良いけど。」

「！　まさか、コイツかよ・・・」

修兵は弓親に聞こえない位の声で呟く。

“隣の隣、副官補佐の隣にいる輩”については、この者しか考えられない。

隣の隣は、九番隊から数えて考えるものだと考えると、七番隊か十一番隊になる。

今、護廷内の副官といえば十一番隊の斑目一角しかいない。　そして、その隣と云えば綾瀬川弓親。

「綾瀬川。　もしかして」

修兵は弓親の瞳(め)を見てゆっくりと言う。

確認するしかない。　こうしている内も時間はどんどん流れていく。

「卍解。　…出来たりするか？」

返事が肯定ならば、修兵の考えが全て当たっていることになる。

答えが確定する。

今の所、この問い以外は全て当てはまっている。

「出来るわけないでしょ」

弓親は平然と答えているつもりのようだ。
しかし、ほんの僅かに霊圧が揺れた。
隊長格でも見逃してしまいそうな、ほんのわずかな微妙な揺れだった。

嘘をつけば、目を見れば大抵わかってしまう。
“目は口ほどにものを言う”と云うが、それが当てはまるのは相手の目の色が見える時だけだ。　盲人には通用しない。
それでも嘘を見抜く為に修兵はちょっとした仕草や声音の違い、霊圧の揺れで見抜く術を身に付けた。
何でも少々の無理をしてしまう上司を持った故にだ。
今となっては、もう戻ることの出来ない過去の話。
だから、どんなに僅かな霊圧の揺れでも修兵が気付けない訳がない。

疑惑が確信に変わる。
すぐに修兵は地獄蝶を九番隊の隊舎に向けて翔ばす。
それを不審に思った弓親が修兵に問う。

「・・・何かあった？」
「俺たちの秘密、教えてやる」
「俺たち？　何それ」
「今日の夜。　隊主室まで来い。」

そう言って、今度は修兵から弓親との距離を取る。

「ちょっと」
「さっきから暗い顔してんじゃねぇよ。」

修兵がそう言うと、弓親は驚いた顔をする。
自分では気が付いていなかったようだ。

「悩み事くらい、いくらでも聞いてやるよ」

じゃあなっと言って、修兵は去って行った。
コスモス畑に1人、弓親は取り残される。

「・・・バカ」

弓親の小さな呟きはコスモスだけが聞いていた。

≪8≫ Miedo

俺たち九番隊にとっても、アイツにとっても。
今夜は変革の夜になるだろう。　俺たちの答えはもう出た。
後はアイツの意思だけ。

昼の言葉に甘えて九番隊(ここ)まで来てしまった。
今更、僕は何をしているんだ。
そんなに仲が良いわけでもない、どちらかと云うと悪い、アイツの言葉をそのまま受け取って。
何もせず、このまま帰ってしまおう。
思わず、ため息がでる。　僕はこんなにも弱かっただろうか。

「…何してんだろ」
「…何してんだ？」

誰も聞いていないだろうと思って呟いた言葉に返事が来て、驚いて振り返る。
僕の数歩後ろに九番隊(ここ)の今の主、副隊長の檜佐木修兵がいた。
しっかりと隊を支えている彼に、地に足がついていない様な今の僕はどう見えているのだろう。

「話をしに来たんじゃねーのか。　こっちに来い。」

そう言って、隊主室を示す。
意志の強そうな真っ直ぐとした目に、僕は思わず目を逸らす。
「…こんなところで、立っているだけの為に来たわけじゃないだろ。　風邪引くぞ」
「そうだけど・・・」
「はぁ～、てめえは」
動こうとしない僕に、ため息をつく。　そして、こっちに近づく。
「きゃぁ」
いきなり僕を横向きに抱き上げた。　驚きのあまり、いつもより高い声が出る。
「何するのさ！」
心音が外に聞こえるのではないかと云うくらい、鼓動が早い。
ついこの間までなら、こんな声を出さなかった。
以前なら何とも思わなかったであろう事にも、過剰に反応するようになってる。
「可愛いところもあるじゃねーか。」
彼は目を合わさずに言う。
すると突然、体が揺れた。　抱き上げられたまま、移動している様だ。
思わず彼の死覇装を軽く握る。
「真っ赤だぞ。　顔」

そう言われて、僕は思わず頬に手をあてる。
昼間の仕返しをされてしまった。

「うるさい…」

そう言った僕の声は意識したのではないのに、とても小さい。
まるで容姿だけではなく、性格までも変わってしまったようだ。

「着いたぞ。」

そう言いながら、彼は僕を椅子に座らせる。
いつの間にか隊主室の中だ。

「正直に言って、本当に来るとは思ってなかった。　…一体、どうしたんだ？」

地面に片膝をついて、僕を見上げる様にして聞いてくる。
視線に耐えきれず横を向く。

「たぶん、気が狂ってるんだよ」
「そうだろうな。　普段なら絶対に、用がないのに来たりしねーだろ。」
「普段ならね」
「じゃあ、今は普段じゃないんだ。　・・・・・だったら、話してみたらどうだ」

僕は俯いて黙る。　なのに相手は静かに僕の言葉を待ってくれる。
優しすぎる。

「…大したことじゃないんだ。」

こんな遅い時間に勝手に押し掛けたようなもんだ。　話すしかない。

「些細なことだよ」

自分を肯定するように頷いてみる。
こんな事を他人に打ち明けるのは恥ずかしい。

「…怖いんだ」

意味を読み取ろうとしているのか、僕の顔を覗き込んでくる。
顔を背けようとした。
だが、寸での所で思いとどまる。
話すと決めた以上、ちゃんと話さなければ。　この思いと、向き合わなければ。
こっちから目を合わせる。

「自分の存在が、居場所がわからないんだ。」

ここまで言うと、堰を切ったように言葉が出てくる。
どんどん溢れだしてくる。

「何の為に、何が理由で・・・此処にいるのか。　一体、何がしたいのか。　自分の考えは何なのか。」

大人しく、僕の言葉を聞いている彼には、自分なりの答えは見えているのだろうか。
思わず、立ち上がる。
不安になって自分の肩を抱く。

「・・・・・なぜ、死神になったのか。　わからないんだ。　そして、色んな事がわかっていない、その事が何よりも怖いんだ。」
言いながら僕は、九番隊の隊主室を飛び出していた。

秋の夜は冷える。　冷たい風が頬を、髪を撫でる。
何も考えずに、飛び出して来てしまった。
意識したわけでは無いのに昼に来たコスモス畑の真ん中に今居る。
美しい月だけが僕とコスモスを照らす。

「綾瀬川」

呼ばれて振り返る。　秋の夜の冷たい風がコスモスと僕の髪を弄ぶ。
こんなに寒い中、いつもの格好で追い掛けてくるなんて彼は寒くはないのだろうか。

「泣いてんじゃねーよ」
「泣いてなんか…っ！」

彼は、僕の頬を指で撫でる。
自分でも気付かずに泣いていたようだ。

「泣いてんだよ。　…自分でも気が付かない様な、嫌な泣き方をするんじゃねえ」
そう言って僕を引き寄せる。

死覇装の布越しに伝わる体温が温かい。

「誰かが傍に居る時くらい、声を上げて泣け。　泣きつけ。」

言われた瞬間、まるで蓋が開いた様に涙が出てきた。

優しすぎる。

僕は甘えて、彼の胸に顔を埋(うず)めて泣いた。

どうせ、月とコスモス。　そして、見知らぬ者しか見ていないのだから。

自分でも不思議なくらい。　この時、僕の霊圧は揺れていた。

宮田が連行された時、砕蜂隊長にも気にされるほど揺れていた。

しかし、最近ではそこまで揺れ動く事はなかったのに。

まるで、自分の弱さを肯定する様で嫌だ。　気に食わない。

≪9≫　L?grimas

夕方の副隊長は誰から見ても必死だった。
それだけ、真剣だったとも云えるだろう。
そんな副隊長を目の当たりにした俺たちは、その熱意に応えなければならない。
俺たちはそれぞれの結論を胸に秘め、コスモスを眺める。

夕方、いきなり皆は修錬場に集められた。
話の内容は、新たな隊長について。
皆、いきなりの話に驚き、憤慨した。
こんなにも副隊長が頑張っているのに今更、と云う思いが大きかったのだ。
しかし、俺たちは副隊長の考え、思いを告げられ考えを改めた。
普段見る副隊長の表情ではなかった。
それだけ、俺たちの理解を得たかったのだろう。
今まで隊を1人で支えてきた副隊長にあそこまで力説されて、俺たちが否定できるはずがない。
決して出来ない。
　現に皆、副隊長の言葉に従って此処に来ている。
…誰か来た。　この人が新しい隊長(ひと)なのだろうか。
その人は偶々こちらに来たようだ。　副隊長の読みが綺麗に当たる。

「泣いてんじゃねーよ」
「泣いてなんか…！」

副隊長の声と女性の声が聞こえてくる。

夕方、副隊長は最後に“その姿を確認しろ。　そいつが九番隊の隊長として認められないと考えるのならば、その場をすぐに立ち去れ。”と言った。
副隊長は俺たちに、隊長の器がある者なのか、九番隊の隊長として相応しい者なのか、を見極めろと言っているのだ。

「泣いてんだよ。　自分でも気がつかない様な、嫌な泣き方をするんじゃねえ。」

隠れている皆が騒ぎだす。
もしかしたら、あの2人に聴こえてしまうのではないかと思うくらいに。

「女だな」
「美人だ・・・」
「泣いてるぞ」
「もしかして副隊長・・・泣かしたん!?」
「それは、いくら副隊長とは云えダメだろ」

周りはだんだん興奮してきた。
皆、帰る気はなさそうだ。
それはあの女性を認めたのか、それともただ単に、これからの展開が楽しみなのか。

「誰かが傍に居る時くらい、声を上げて泣け。　泣きつけ。」

副隊長の言葉はこんなのだが、声はとても優しい。
2人の距離が近くなる。

「えっ、まさか…」

「誰かカメラーっ！！！　写真撮って！！」
「イヤー！　檜佐木副隊長ぉ！」

始めは、皆と副隊長たちとの距離は会話が耳を澄ませば聞こえる程度に離れていた。
しかし皆、興奮が抑えきれず、だんだん前進していっている。
その距離、下手すりゃ直ぐにバレる程。
さっきでも、結構近かったのに…。
近くでよく見ると、女性が副隊長の胸で泣いている。
副隊長ファンの女性隊士からは小さな悲鳴が、男隊士からは息を飲む音が。

「怖いことがあるのは当たり前だ。」

この副隊長の言葉を久しぶりに聞く。
皆、一斉に大人しくなった。　息をすることも忘れて聞き入る。

「怖いことが無いなんて言う奴は、怖いと云う感情と向き合おうとしていない。　そんな奴はそれ以上伸びない。　そして、それが、いつか欠点となって足元をすくわれる。」

九番隊に入隊して任務に慣れてきた頃合いに、皆一度は副隊長から直接聞いている。
以前は隊長が話して下さっていたらしい。
たとえ、この言葉が前隊長の教えであったとしても、この話を聞くと云うのは、俺たちにとって厳かな儀式の様なものだ。
ちなみに俺はこの言葉を聞いた後、けじめとして髪を切った。

「怖い事と、ちゃんと向き合っている奴は、それだけで堂々といて良い。　前を見ろ。」

そう言って、副隊長は女性を自分の胸から離し、目を合わせた。
女性はその視線に応えるように目を合わせた。

≪10≫　Confesi?n

2人はコスモス畑の真ん中で見つめ合っている。
月の光だけが2人を照らしている。

「うるさい。　僕は君に説教される程・・・」
「何かに理由が欲しいのなら、無理にでも作れば良い。　俺が理由になってやる。」

女性の言葉を遮った副隊長の発言に、皆目が真ん丸になる。
言われた女性も驚いているようだ。
果たして副隊長は、俺たちが此処にいる事を覚えているのだろうか。
もし忘れていて言っているのなら、この発言は相当恥ずかしいぞ。
俺なら絶対に言えない。

「居場所なら、俺がやる。　・・・俺の傍を居場所にしろ。」

言いながら副隊長は女性の両手をとり、片膝をつく。

「怖がる事を恥じるな。　・・・そんなに嫌なら、俺が共有してやる。　だから俺の傍に居ろ。」

まるで愛の告白だ。
皆から色々な反応が出る。
口が開いてふさがらない者。　白目をむいている者。　共通している事は、皆無言。

「ふふっ。　…君、部下の前でよくそんな事が言えるね。」

女性が空の遠くを見て言う。

「・・うるせぇ…。」

副隊長たちにとって、俺たちが居たことはバレバレだったようだ。
霊圧でバレたのだろうか、それとも単に煩かっただけだろうか。

「・・・出て来い」

副隊長は俺たちを見ずに言った。
恥ずかしかったのだろうか、・・・いや違う。　どう見ても、副隊長は真剣に言っている。　女性の事だけを見て言っている。
本当に、この女性が新たな隊長となる死神の様だ。
副隊長は深呼吸をしてから言葉を紡ぐ。

「・・・十一番隊、第五席。」

皆に動揺が走る。　十一番隊の第五席は、彼しかいないのだから。
まさか、目の前の女性があの人だなんて。
信じられない。
この間会った時、男ばかりの隊で五席として刀を振っていたではないか。
そして、十一番隊の五席は男だ。　目の前の死神は、どう見ても女性にしか見えない。
本当に、同一人物なのだろうか。
しかし、今更それくらいで俺たちの信念は崩れない。
九番隊と仲の悪い十一番隊からの死神だろうと、誰であろうと。
こちらの思いは固まっている。

「綾瀬川弓親に総隊長からの伝言を伝える。」

あくまでも“伝言”なのだ。　“命令”ではない。
全員、息を潜める。

「九番隊、隊長に任命したい。　受け入れるか否かは、好きにせよ。」

俺たちは、綾瀬川五席と副隊長を中心になる様にして近づく。

「…君たちは」

綾瀬川五席は俺たちを見て、副隊長をもう一度見る。
そんな彼女の横顔は月の美しさに全く劣らない。　たとえるのなら、月下の美人。

「こんな僕を？　これは、君たちの望みなのかい？」

冷たい風が吹くだけで、それ以外の音は一切聞こえない。
静寂の中に俺たちは居る。

「俺たちの望みは一つだけだ。」

俺たちは皆、副隊長にならって片膝をつく。

「貴女に俺たちの隊長になっていただきたい。」
「僕はこんなにも不完全なんだよ…」
「だからこそだ。　完全な奴なんていない。　・・・俺が居場所になってやる。　だから、俺たちの帰る場所になって欲しい。」

綾瀬川五席の目から一筋の涙が。　月の光を受けてキラキラ光る。

「僕なんかで本当に良いの…？」
「皆、てめえの弱い部分も見た上で此処に残っている。　…ダメなら此処にはいない。　それに、俺たちは総隊長からこの話を聞いた時、断ることだって出来た。」
言いながら、副隊長は綾瀬川五席の涙を指で拭う。
「俺たちの選択はもう終わってるんだよ。　あとは・・・」
「僕次第・・・か。」
「・・・・副隊長。」
白雲三席が副隊長に何か白い物を渡す。
結構な大きさがある布ようだ。　少し遠いので何なのかは分からない。
「ありがとう」
副隊長はそれを受け取り、綾瀬川五席の目の前で“九”の文字が見えるように広げる。
隊首羽織だ。
「・・・」
綾瀬川五席は無言で“九”の文字を指でなぞる。
そして、白雲三席を見て言う。
「・・・僕が、・・・・・・九番隊をぶっ潰す隊長になるかもしれないよ」
「構いません。　・・・それに、貴女がその様な事をするような

方には思えませんから。」

三席はハッキリと言う。　真っ直ぐと見つめ返しながら。
次は、俺を見て言う。
いつの間に俺を見つけ出していたのだろう。

「・・・十一番隊の長女を悲しませたら、周りが怖いよ。」
「これでも俺は十一番隊から出てきた奴ですから。　姉を悲しませたりする事は絶対にしません。」

俺は笑いながら答える。　覚悟はすでに出来ている。
そして、副隊長を見て言う。

「・・・君は僕を受け入れられるのかい？」
「何でも受け入れてやる。」

副隊長は副官章を腕から外しながら答える。

「…十一番隊の娘さん。　九番隊へ嫁に来い。」

言いながら、羽織と共に差し出す。
それを綾瀬川五席は、やっと手を伸ばしてきた。

「・・・仕方がないね。　行ってあげるよ。」

そして新たな隊長は、副隊長から副官章を受け取る。
副隊長は羽織を羽織らせる。

「九番隊の檜佐木修兵。　僕が嫁に行ってあげるんだから、ずっと傍に居るんだよ。　僕の居場所になるんだよ。」

この2人の会話は聞いていて、何だか恥ずかしい。　今までの会話を聞かずに、いきなりこれを聞くと勘違いするぞ。　どう考えても告白じゃないか。
そして、彼女は俺のそんな胸中を知ってか知らずか、俺たち一人ひとりの顔を見て言う。

「・・・君たちが僕の存在理由になるんだよ。」

そう思っているのは俺だけではない様だ。
皆、少し目が泳いでいる。

「九番隊の副隊長に任ずる。　引き続き、九番隊の為に尽力せよ」
「隊長の命とあらば」

副官章が檜佐木副隊長の腕に括りつけられる。

「…皆、よろしくね」

月が美しい今宵、九番隊の新たな隊長が俺たちに頬笑みを贈ってくれた。
頬に涙を光らせて。

その姿を見て誰かがため息をつく。

「あの方は、まさに艶姫(えんき)だ・・・」

小さく呟いた。

彼女は、まるで虞美人草の花の様
ここに新たな白芥子の隊長が生まれた

Ｕｎ　ｆｉｎ　　愛しさ故に　～Ｅｌ　ｐａｒａｄｅｒｏｄｅ　ｌａ　ｐｒｉｎｃｅｓａ～

≪11≫　Saludos

目の前に居る彼女は、これから九番隊をどのような色に染め上げるのだろう
それは、希望の色か絶望の色か　どんな色でも付いて行こう
もう覚悟は決めたのだから　戻る事は出来ない、しない

朝っぱらから、新隊長の就任の儀が行われる。
就任の儀と云っても、昨晩に済ませた様なものだから簡単なもので、
あの時居なかった奴の為に行う。
その程度の事だ。
しかし、今朝になっても帰ってきていない奴がいるが、それは仕方がないだろう。

「隊長～。　これ着て下さい。　きっと似合わはります！」

突然、隊主室にノックをせずに入ってきたのは、九番隊の第五席である如月奏恵（きさらぎかなえ）だ。
手に何か黒い布を持っている。

「なんや、副隊長やはったんですか。　・・ちぇっ」
「居て悪いか。　あと、舌打ちするな。」
「まあ、どうでも良いですけどね。　ところで…隊長っ！」

俺の事はあっさり流しやがる。

「何かあった？」

本日、正式に隊長になる綾瀬川隊長が如月に問う。

「男どもが、隊長が綺麗や言うて五月蝿いんですわ。　せやから、女みんなで黙らす方法を考えたんです。」

だから、朝から女隊士は皆見当たらなかったのか。

如月の顔がいたずらっ子の表情になる。

「で、思いついたんがコレです。　ジャジャーン」

変な効果音を言いながら手の黒い布を広げる。

正体は死魄装にしては変だ。　違う点がある。

「隊長なら絶対に似合わはります！　早速、これを着て就任式に行って来て下さい。　副隊長、出てって下さい。」

俺は如月に隊主室から追い出された。　扉が閉められる。

「如月！？」

「副隊長はそこで大人しく待っていて下さいっ！」

「はぁ？」

待っていろとは、どういう事だ。

言われた通り、大人しく待っているのは癪だが仕方がない。　綾瀬川隊長と最後の確認がまだだ。

「隊長っ！　似合ってはりますって。　大丈夫です！　さあ、行って下さい。」

終わったようだ。
如月は綾瀬川隊長に何をしたんだ。

かちゃ

扉が開けられた。

「檜佐木…」

出てきた綾瀬川隊長の顔が真っ赤だ。

「羽織忘れてはりますよ。　では、いってらっしゃーい」

そう言って、綾瀬川隊長を部屋から押し出し、俺に羽織を手渡す。

がちゃ

鍵を閉められた。　これでもう扉は開かない。

「真っ赤」

「うるさい…」

俺が言うと、綾瀬川隊長は両手を頬にあてる。

「これは恥ずかしい」

言いながら視線を落とすので、俺はつられて目を下にやる。
そして思わず、即座に視線を上げて明後日の方向へやる。

「・・・」

なにも言えない。
普通の死魄装は袴だ。
しかし、袴をはない。　普通の着物とも異なっている。　スリットが入っている。
そこから、白く細長い足が大胆に。

「何か言いなよ！　恥ずかしいんだから」
「…似合ってんじゃねーか？」

正直に言う。

「嘘っ」
「今、嘘ついてどうする…」
「ひゃー。　僕を口説いてどうしたいのさ！」

言いながら隊長は頭を抱える。

「はぁ！？　どうしてそうなる」
「副隊長～。　うちらの隊長に手ぇ出さんとって下さい。」
「如月、黙れ…」

如月は扉ごしに口を挟んでくる。

「…まさか、これで？」
「・・・そのまさかだな。　時間がない。」
「えっ！」
「嫌なら如月に此処を開けさせるしかない。」

綾瀬川隊長は扉と向き合う。

「奏恵…？」

「隊長～。　早よ行かへんと遅刻ですよ」

「奏恵っ！」

「副隊長～。　皆を待たしてまっせ～」

「如月っ！」

如月にしてやられた。

「行くしかねーな…」

言いながら、綾瀬川隊長を横に抱く。

「えっ！　修兵！！」

「残念ながら時間がない。　恨むなら如月を恨んで下さい。　どうせ身内しか居ないんですから。　恥ずかしくないでしょ」

「はぁ！？　僕は、修兵に見られただけでも恥ずかしいんだよ！」

俺はそんな叫びを無視して思いっきり地面を蹴り、修練場へ向かった。

修練場に着くと、皆揃っていた。

もちろん如月もだ。　足はとことん速い奴だ。

俺たちが到着すると、場内の空気が一変した。　綾瀬川隊長をおろす。

「只今より、就任の儀を執り行う。」

今回の様な例は異例だ。　既に隊士が隊長を認めている。
だから、形だけ行う。

「既に皆が知っている通り、この方が新たな隊長だ。」

そう言って、綾瀬川隊長にアイコンタクトを送り、羽織を着せる。
羽織を着た新隊長が一歩前に出る。

「僕が新しく隊長になった、綾瀬川弓親です。」

皆、隊長の死魄装が普通のではない事に気付く。　少しざわつく。
本人は気付いていないのか、わかっているのか、そのまま続ける。

「僕が言っておきたい事は…。」

ひと呼吸おく。

「敵に上司が殺(や)られそうになっていた場合、部下は迷わずに敵を倒せ。　もし、そこで助けに入れば、たちまち敵に殺られてしまい、被害が増えるだけだ。　無駄に、生命を捨てるな。」

皆、息をするのを忘れて聞き入っている。

「敵に部下が殺られそうになっていた場合、上司は迷わずに部下を助けろ。　そして、敵を倒せ。　護られたくなければ、護りたければ、強くなれ。　・・・・・間違っても、庇う相手だけは間違えるな。」

もしもの事があれば、隊長を見捨てろと云うことだ。
この人は酷な事をさらっと言う。

「僕は君たちが選んだ隊長なんだ。　君たちの顔に泥を塗らぬよう、全力を尽くす。　だから・・僕の存在理由になってほしい。」

全員の顔を見渡して、最後に俺を見る。

「君が僕の新たな居場所だから、」
「貴女は俺の新たな帰る場所です。」

お互い、確認する様に言葉を繋ぐ。
此処に新たな九番隊隊長が就任した。

≪12≫ Un anuncio

就任の儀も無事に終わった。
通常であれば、他隊の隊長や副隊長に顔を見せてから自隊への挨拶なのだが…
どういう事だ？　とりあえず、聞いてみるしかない。

「修兵、どうして順番が逆なの？」

僕は後ろに向かって問う。
主語がないが、彼は意味を理解してくれるだろうか。

「・・・隊長の決まり方が普通ではないですから。　総隊長が先に済ませておくようにと。」
「そうだったんだ」

しっかりとした返事が返ってきた。
隊主室に着く。
修兵が扉を開けてくれた。

「・・・」

思わず黙ってしまう。
頭を抱えたい気分だ。

「隊長？」

修兵の心配そうな声に我に返る。
振り返りながら言う。

「やられた・・・。」
「え？」
僕は修兵の腕を思いっきり引いて、部屋に連れ込む。
机の上には切り刻まれた死魄装。　その横には、奏恵特製の死魄装が。
「これは如月の仕業ですね。　…今日の昼に隊首会があるので、出席して下さいよ。」
「そんなの聞いてない。」
「今言いました。　恐らく、どこの隊長よりも早く知ったのでは…？」
「はぁ…」
思わずため息が出る。
「隊長」
修兵が僕を宥めるように言う。
「それまでに普通のを見つけないと・・・」
「嘘っ」
まさか、この格好で行けと言うのか。
「本当です。」
目を真っ直ぐ見て言われる。
探すしかない。

「隊長〜。　お綺麗でしたよ。　思惑通りになりすぎて気持ち悪いくらい」

どういう意味だ。

自隊の五席に完全に遊ばれている。

「…まともなのは無いの」

「全て八つ裂きにさしてもらいましたー」

その楽しそうな声に、僕はため息をつく。

新しいのを調達しなければならない。

「隊長」

呼ばれて振り返る。

修兵の指には地獄蝶が。

「今から行うらしいっすよ。」

「何を」

わかっているが問う。

出来れば予想が当たらないでほしい。

「隊首会を今から。　副隊長にも召集が出たんで行きますよ。」

「急だね」

「いつもそんなもんっすよ。　さあ、行きましょう」

仕方がない。

今からなら、すぐに向かわなければならない。

「奏恵、行って来る」
「如月、行って来る」

2人の声が重なった。
思わず顔を見合わせる。
奏恵の顔からは笑みがこぼれる。

「いってらっしゃいませ」

奏恵は片膝をついて言った。

2人で一番隊へと向かう。
柄にもなく緊張している。

「そんなに身構えることはないっすよ」

修兵にバレているのが腹が立つ。

「…気付いてねーのかよ」
「何」

まじまじと顔を見られる。

「昔よりも感情が、顔にも出ている」
「昔より？　顔にも？」

他に出ている所でもあるのか。
「多分、俺以外は気付いてないと思うが…」
話している内に到着してしまった。
「前からだったが、何か不安だったりすると僅かに霊圧が揺れる。」
「えっ？」
立ち止まる。
思いもしなかった答えだ。
「ついでに言うと…。　昨日の昼、嘘をついたのも俺にはバレてる。」
修兵の目が少し悲しそうになる。
昨日の昼と言えば・・・、卍解の事だ。
「…何？　落ち込んでるの」
「違うっ」
「はいはい。　ゴメンねー」
僕は言いながら、まるで小さい子を泣き止ませる様に少し背伸びをして頭を撫でてやる。
「止めてください」
「これじゃあ遅刻になるね。　あっちに行けば良いの？」
向こうの廊下を指差す。

「行けば判りますよ。　隊長格の霊圧が複数あるはずです」
「わかった」
「では、後程」

僕が歩いたのを確認して、修兵は自身が向かうべき部屋へ向かって行った。

≪13≫　Entendiendo　mal

隊長と別れて、俺は副隊長が集まる部屋に入った。
思っていたよりも揃ってはいない。
俺は何も考えず、適当に阿散井の横に座る。

「檜佐木先輩・・」
「何だ？」

阿散井が、何か言いたそうに話しかけてきた。
その他の奴も、なにやら興味津津でこちらを見ている。　どうやら、阿散井は言わさせられているらしい。

「あの・・・」
「ちょっと恋次！　早く言っちゃいなさいよ！！！」
「そう言われても・・・！」

乱菊さんが阿散井を急かす。
一体、俺が何かしたと言うのだろうか？

「もういいです。　私が聞きましょう。」

真面目な顔で、そう言ったのは伊勢だ。　伊勢がこんな事を言いだすのは珍しい。
皆の表情は依然として好奇心に満ち溢れている。

「今日の朝、一緒に歩いていた女性は誰ですか？」
「はぁ？」

おそらく、修錬場へと向かう隊長と俺の事だろう。
いつ、どこから見ていたんだ。

「修兵。　はぐらかしてもダメよ。」
「何がですか」
「私、見っちゃったんだから。　２人で九番隊の隊舎を仲良く・・・・」

乱菊さんが悪戯っ子のような表情で云う。
なぜ他隊の朝の風景を見ているんだ、この人は。

「それは・・」
「檜佐木先輩、白状してください。」
「そうです。　往生際が悪いですよ。」

阿散井に続いて、吉良までこんな事を言いだした。

「おい、何を勘違いしてんだ?」
「隊長が不在の中、遊んでいるとはどういうことですか!?」

伊勢に熱が入ってきた。　このままでは厄介だ。

「何の話をしているのだ」

そこにやって来たのは、二番隊の副隊長である大前田希千代だ。
この人まで話に加わってくると、話がややこしくなる。

「それがぁ・・・」

乱菊さんが、すかさず説明し始める。

「面倒だから、要約するわ。　修兵が女をつくったのよ」
「「「はいーっ！！？？」」」
「きゃー♪」

複数の声が部屋に響く。
いつの間にか、四番隊の虎徹勇音や五番隊の雛森桃も加わっていた。
後の声は十二番隊の草鹿だろうか。
そして、一斉に俺の顔を見る。

「はぁ～。　違いますってば・・・」
「今更、何を隠しているのよ。」

俺はため息をつきながら否定するが、乱菊さんは納得しないようだ。
それに雛森が喰いついてくる。

「・・・いつ、どこで出会ったの？」
「だから、そんな関係じゃない・・・」

もう何を言っても信じてもらえなさそうだ。
諦めるか。

「阿散井、吉良。　助けろ」
「どうしましょうかね・・・。　この方が面白いし」
「嫌です。　何より、女性を敵に回したくありませんから。」

後輩に助けを求めるも、２人はあっさりと興味に押し流されているようだ。
ここに俺の味方は居ない。
乱菊さんが詰め寄って来る。

「だから誰なのよ。　言っちゃいなさいよ、楽になれるわよ☆」
「そんなんじゃないっスから」
「じゃあ、私が見たのは何だったって言うのよ！」

騒いでいるうちに各隊の副隊長が勢ぞろいした。
俺たちが騒いでいる理由が分からず、不思議そうにしている。

シュゥッ・・

いきなり俺の後ろの襖が開かれ、太陽の光が部屋に差し込む。
そして、その勢いのまま背中に抱きつかれた。　額が俺の肩に軽く押し付けられる。
皆の視線が俺に集まる。

「緊張した～。」

長い髪が俺の顔の横に流れてきた。
俺の首に軽く回された腕に通されているのは、着る者が限られている白い羽織。
間違いなく、これは隊長だ。

「・・・放して下さい。」

腕を解き、振り返りながら言う。

「悪い悪い。　本当に緊張したんだから」
「修兵！」

俺は乱菊さんに腕を引っ張られて、隊長から引きはがされる。

そして、皆に囲まれる。

「あの女性は一体誰ですか！！」

「修兵！　私が見たのはあの人よっ！」

「檜佐木先輩、何処の隊の人ですか？　六番隊じゃないです」

「初めて会いますね。　三番隊でもないです」

順番に乱菊さん、伊勢、阿散井、吉良だ。

話題の中心の本人はキョトンとして俺たちを見ている。

「何してんだ？」

「あ、隊長」

現れたのは十番隊の隊長。　皆の視線は一斉に俺から外れた。

乱菊さんは興奮気味に話しだす。

「隊長。　私が朝に話した事覚えてます？」

「ああ、それがどうした。」

「彼女ですよーっ！」

乱菊さんは隊長を指しながら言う。

「おい、松本。　失礼な事をするな、そいつは・・・」

すると日番谷隊長の言葉を手で制し、隊長は立ち上がった。

ここで皆は、彼女が羽織を着ている事にやっと気が付く。

「日番谷隊長、構いませんよ。　後は自分で、どうにかします。」

「そうか、わかった。　何かあれば言ってくれ。」

「有り難うございます。　さて・・・恋次、私は誰でしょう？」

日番谷隊長が去って行く。
そして、振り返りながら阿散井に声をかける。　自分が誰であるのか分かるか試すようだ。
俺は黙って、姿勢を正す。

「えっ？？」
「射場さん？」
「？？」

阿散井が答えられないとわかると、すぐさま標的を変えて問う。
しかし、皆わかっていないようだ。

「ちょっと、わからないの？　副隊長、ちょこまかしないで下さい」
「はーい♪」

言いながら隊長は、走り回る草鹿を慣れた手つきで捕まえる。
すると草鹿は大人しく隊長の腕の中に収まっている。

「ゆみちー！　元気にしてた？」
「はい、おかげ様で」
「えっ。」
「もしかして・・・」

やっと誰か分かったようだ。
俺は隊長の傍で片膝をつく。
隊長は草鹿を下ろし、俺に目を合わせる。　そして皆の方を見て言う。

「僕は九番隊、隊長の綾瀬川弓親だよ。」

「「「えぇーーー！！！」」」

やはり、このくらいの反応が正解なのだろうか。

副隊長ともなると霊圧でわかっても良いと思うんだが・・・

≪14≫ No lo entiendo

隊長は俺と目を合わせる。　そして皆の方を見て言った。

「僕は九番隊、隊長の綾瀬川弓親だよ。」

「「「えぇーーー！！！」」」

皆の驚く声が部屋に響く。

そんな事を構わず、隊長は俺を見て話しながら座った。

「やっぱり普通は分からないんだよ。　どうして君はわかったかなぁ・・・？」

「いや、普通は分かるでしょ」

俺たちの会話をよそに、皆は何やら話している。

そして、阿散井をこちらに押しやって何か言わそうとする。

「あの・・・弓親さん？」

「？　何、恋次」

「一体、どういう風の吹きまわしっスか？　急じゃないですか。」

「話せば長い」

「十一番隊は・・・？」

「話せば長い」

「なぜ、そんなに髪が急に長くなって・・・？」

「話せば長い」

「はぁ・・・。」

阿散井は隊長の何を聞いても同じ答えにお手上げの様だ。

それに代わって乱菊さんが前に出て、まじまじと隊長を見る。

「ちょっと、髪が伸びただけじゃないじゃない。　背も少し縮んだ？」
「そうだよ」
「何？　その死覇装」
「・・・・・。」
「うちの五席がやらかした」
黙って俯く隊長に代わって俺が答える。
「そうなんだ…。　大胆ね」
何がだ。
隊長は立ち上がり俺を見下げる。
「帰る」
「わかりました」
「でも、男にその死覇装はやりすぎじゃないッスか？」
阿散井がいつの間にか乱菊さんの横に立って、隊長を見降ろす。
その言葉を受けて隊長は、小さくため息をついて自ら阿散井に近寄る。
「・・・驚かすよ。」
いつか聞いた言葉だ。　この後の隊長の行動が予想できる。
あの時と同じだ。
阿散井の腕をいきなり掴む。
自身の胸に押し当てるようにして、今回は思いっきり阿散井に向かって飛びこむ。

「くぇｒｔｙｈｃｄｘさうぇｒｇｋｊｍｋｌ；！？！？」

意味不明な言葉を、顔を真っ赤にして眼は見開いて、阿散井は叫ぶ。
見た目では目立たないのだが直接触れさせられると、乱菊さんまでとは言わないが、身長の割には結構豊満なのが分かる。
阿散井は俯いてしまった。
それを見た隊長は楽しそうに俺を見て言う。

「ははっ。　可愛い可愛い。　反応が初々しいねぇ～♪　檜佐木と違って」
「・・・帰りますよ」
「は～い」

いつかと同じように、俺は隊長の背に立って九番隊舎まで帰って行く。
真っ赤な阿散井や隊長の発言に騒ぐ同業者をそのままにして。

一体何よ。
恋次が顔を真っ赤にして叫ぶなんて・・・。
２人が去った後、残された私たちは恋次を取り囲む。
恋次は顔を真っ赤にして自分の手を見ている。

「ちょっと。　どうしたのよ、恋次。」
「阿散井くん。　髪の色と顔色の見分けがつかない程、赤いよ。」
「情けないですね」

吉良と七緒も私の言葉の後に続いて言うが、恋次は俯いたままだ。

「吉良。　松本副隊長に同じことをしてもらえ。　たぶん、今の俺と同じような反応になる。」
「はぁ！？」

吉良が訳が分からないと云った風の声を出す。　意味がわかった。なんだ、そういう事か。　でも・・・？

「どうして、そんな事になるのよ。　弓親は正真正銘の男じゃなかったの？」
「確信をハッキリ言うんスね・・・。　檜佐木先輩なら知ってるんじゃないんスか？」
「そうね・・・。　って事で恋次、あんたが聞いてきなさい。」
「どうして俺が！？」

やっと恋次が頭をあげた。
今でも少し顔色は赤い。

「後輩なんだから聞きやすいでしょ。」
「それなら吉良でも良いでしょうっ」

恋次の叫びを無視して、私は七緒を見る。

「私は十番隊で報告を待っているから☆　七緒も来るでしょ」
「いえ、私には仕事がありますので失礼させていただきます。」
「堅い堅い。　気にならないの？」
「今は自隊の仕事をなさった方が良いのでは？」

そう言いながら、七緒は私を思いっきり睨んだ。
怖い。

「・・・だから、十番隊なんじゃない。」
「今、適当に言いましたよね…。」
雛森まで、そんな事を言うなんて・・・。
私に味方は居ないの？　まあいいわ。
「…兎に角！　恋次、よろしくね♪」
「ちょっと！！」
そう言って私は逃げるように部屋を後にした。

≪15≫ Es usted

九番隊の隊舎にまで戻ってきた。
俺たちは門をくぐり、隊首室へと向かう。
新たな隊長の就任初日だ。　やるべき事はいくらでもある。　出来るだけ早く終わらせたい。
隊首室の前で、誰かが立っている。

「…あっあ、あのぉ」

声をかけて来たのは、真っ白な容姿の少女。
九番隊の隊士ではない。　制服を着ている事から判断できる、院生だ。

「こんな所でどうした」
「わたし…。　ああのっこれ！！！」

そう言って、俺に小さな箱を押しつけて走り去って行ってしまった。
赤い眼の真っ白な少女。

「何だろう・・・。　知り合い？」
「霊術院で教えている組に居る子ですよ。　でもコレは何なんスかね」
「ふ～ん…。　何だろうね」

やっと隊首室に入る。
白雲が掃除をしておいてくれたのだろう。　窓が開けられており、入って来る風が心地よい。
まるで夢の中にいるよう。　しかし、机を見ると現実に引き戻され

る。
複数の文鎮で抑えつけられているのは、高く積み上げられた書類の山。
隊長はその山を見ながら、ソファに座って言う。

「これを全部、すぐに終わらせないといけないの？」
「すぐって云う訳じゃないっスけど」
「じゃあ、寝て良い？」
「構いませんよ。　隊長が起きたら、次は俺が寝るんで」
「わかった」

あの夜から一睡もしていない。　なので、お互い眠たくて仕方がない。
隊長は自分が座っている真横を軽く叩く。　そこに座れと云う意味だろうか。
俺は大人しく隊長の真横に座り、小さな箱を机の上に置く。

「おやすみ」

そう言って隊長は、俺の肩に頭を預けて目を閉じた。
だが、すぐに目を開けてしまった。　何かあるのだろうか。
俺はすかさず声をかける。

「どうかしましたか？」
「あのさぁ。」
「はい」

恥ずかしそうに俺から目をそらしながら言う。

「起きたら居なくなってるとか…ないよね」

思わぬ言葉に驚いてしまった。　十一番隊の五席からは想像がつかない言動だ。
彼女は一体、何に怯えているのだろうか。
今の俺にはわからない。　だが、分かるようになりたい。
その為には彼女の事を知る必要がある。　だから、普段なら沢山質問をぶつける。

「大丈夫です。　俺は貴女の横に居ますよ」

しかし、今回は止めておいた方が良さそうだ。
なぜなら、隊長の顔が一気に疲れたような表情になってしまったから。
でも、これだけはハッキリさせておかないとお互い眠れないだろう。

「貴女にとって俺は何ですか？」
「えっ、それは」

隊長は少し困った表情になる。

「修兵は僕にとっての、居場所であり存在理由であり…。」

斑目にはそういう感情を持つ事が無かったのだろうか。
どこか、紡がれる言葉がたどたどしい。

「俺にとっても同じです。　貴女なんです。」

俺は目を見てハッキリと言う。　すると安心したのか、頷いて再び俺の肩に頭をのせた。
今度こそ眠ったようだ。

まるで死んだかのように動かない。
どれだけ爆睡しているんだ。　この人は。

トン、トントン

扉を叩く音がする。　いつもと違う叩き方に誰なのかが分からない。
九番隊の者ではなさそうだ。

「檜佐木先輩！！」
「どうした。」

返事を待たずに入って来たのは、さっき会ったばかりの阿散井だ。
此処に来た理由はだいたい予想がつくが、一応問いかける。

「真相解明の為に・・・・」
「はぁ～」

予想通りの答えに、思わずため息がでる。
隊長が話さない限り、俺が答えるつもりは一切ない。

「隊長に聞け」

そう言って俺は隊長を見るが、すでに夢の国の住民になっている。
ちょっとやそっとでは起きなさそうだ。

「・・諦めろ」
「そんなこと言わず…。　このあと十番隊に行って報告しないと
いけないんスから」
「・・・乱菊さんか。　何が知りたいんだ？　あと、うるさい。」

俺がそう言うと、阿散井は隊長を見た後、目に見えるかのように小さくなった。
そして声を小さくして言う。

「すみません。　・・・、どういうことですか？」
「何がだ」
「だから、弓親さんについてです。　変貌しすぎでしょ」
「…この前あった、元九番隊隊士が虚を瀞霊廷内に放っていた事件を覚えてるか？」
「はっきりと覚えています」
「その元九番隊士が関係しているらしい。　霊圧に蓋をしていた反動が偽りの姿を形成していた。　よって、今の姿が本来の姿らしい。」

この真実は、宮田の死亡によって永久（とわ）に闇に葬られた。
推測を他人に話す事は良くないので、宮田本人の発言を伝える。
俺は信じていないが。
俺が阿散井たちに話してやれることは此処までだ。　今、俺の横ですやすやと眠っている彼女がまだ傷を引きずっている可能性がある以上、俺からはもう話す事は出来ない。
隊長が頭をのせ直す。
目は閉じたままだが、起きているのだろうか。

「それで・・・。」
「ああ。　後は何かあるのか」
「…、急じゃないですか？　しかも、檜佐木先輩はすでに知っていたんすよね・・・」

普通は隊長が副隊長達が居る所にやって来て、いきなり告げられるのだ。

私が新たな隊長であると。

「この人に隊長になるよう、直接頼みこんだのは俺だからな」

「「「えええーーー！！！」」」

驚く阿散井の声以外の声が複数。

吉良、雛森だ。

阿散井は2人を見て目を丸くしている。　もしかして全く気が付いていなかったのだろうか。

「えー！　いつから居たんだ？」

「何がだ、位から」

「最初からじゃねーか、吉良！」

「まさか、阿散井くんが気付かないなんて思わなかったよ」

「うるせー、雛森！」

さすがだ。　立場が同じ同期は特に結束が固いのだろう。

しかし、三人が揃うと煩過ぎる。

「うるさい」

俺はこう言って隊長をさす。

規則正しく揺れる体。　どうやら本当に眠っているようだ。

「「「すみません」」」

3人して縮こまる。　本当に仲が良い事だ。

見ていて微笑ましい。

「俺から言える事はもうない。　三人とも帰れ」

「「「失礼しました・・・」」」

3人は仲良く隊首室を出て行った。

依然として我らが隊長は、俺にもたれかかったまま眠っている。

他人の前で眠る事が出来る

それは、他人に対する信頼の証

≪16≫　Felicidad

隊首室から誰かが出てきた。
よく見ると吉良副隊長、雛森副隊長、阿散井副隊長だ。
何かあったのだろうか？
吉良副隊長は瞬歩で去って行った。　それに続いて雛森副隊長の姿も消える。
とりあえず、私は残っている阿散井副隊長に挨拶をする。

「こんにちは、阿散井副隊長。　五席の如月奏恵です」
「弓親さんの死覇装を？」
「あ、そんな事まで知られちゃってますか。」

しょうもない事が副隊長方に広まっているなんて以外だ。
まあ、あの姿を見れば質問したくなる気持ちは分からないでもないが。

「どう思うわはります？」
「どうって？」
「なかなか、似合ってはりますよねぇ？」
「・・そっそうだな」

五席である私が副隊長にこんな事を思うのは失礼であるが、少し顔を赤くして言う姿は見ていて可愛らしい。

「何照れてはるんですか。　檜佐木副隊長なんか、本人に照れもせずに直接言わはったのに」
「ええっ！」

よほど信じられなかったのだろう。
廊下に座り込んでしまわれた。　そして、目が真ん丸になっている。

「事実ですよ。　・・・その時もそうでしたけど。　正直、あの2人の会話は聞いてられませんわ」
「どうしてだ？」
「聞いてる方が恥ずかしいんですよ。」

私が知る限り、あれ程の絆を短時間で築き、それを隊士の前で見せびらかすなんて事は他隊ではないだろう。
声を落とし、かつ阿散井副隊長の耳元で言う。

「・・・まるで恋人同士みたいで」
「はぁ！？　本当か？」

廊下に阿散井副隊長の声が響く。
そこまで驚くのは無理もない。
そのような印象が、九番隊の副隊長には一切ないから。　そして、十一番隊の前五席にはもっとないから。

「事実です。　今回、新たな隊長を迎えるにあたって副隊長が直接頼み込んだ時もですよ。　知りたいですか？」
「・・・ああ」
「…月明かりの中、コスモス畑の真ん中で私たちは副隊長に言われて待ってたんです。　新たな隊長が現れるんを。　そしたら、今の隊長がそこにやって来たんです。」

阿散井副隊長は真剣な眼差しを私に向けて聞いている。
話しがいがある方だ。

「その顔をよく見たら泣いてるんです。　ほんで、副隊長がその涙を拭いながら言った言葉は・・・」
「…何なんだ？」
“「俺の傍に居ろ。　居場所なら俺がなってやる”」
「！」
説明しているだけなのに無性に恥ずかしい。
体が火照って来てしまう。
「他にも色々沢山言ってはりましたよ。　でも私からはコレだけにしときます。」
「教えろよ」
阿散井副隊長の目が好奇心で染まっている。
いつまで経っても少年のような方だ。
「嫌ですよ。　恥ずかしいですもん。　なんなら、あの2人には黙って通信にまとめてばら撒きますから。」
「頑張れよ」
「任せて下さい。　こういう事には才能を発揮するんで。」
「頼もしいな。　引き留めて悪かった。　楽しみにしてる」
「有り難うございます。　今度とも、九番隊をよろしくお願いします。」
「こっちこそ。　じゃあ」
「失礼します」
阿散井副隊長は去って行ってしまわれた。
やはり、他隊の副隊長と話すのは緊張する。　いつになっても慣れない。
完全に阿散井副隊長の姿が見えなくなってから、この場まで来た

理由を思い出す。

トントントン

隊首室の扉を叩く。
この資料に、隊首印をもらわなければならない。

「如月です」
「入れ」

自隊の副隊長の聞きなれた声に安堵しつつ、部屋に入った。

「如月、阿散井に何しゃべった」
「何でそんな罪人を見る様な眼で見はるんですか？　私はただ副隊長の武勇伝をお話していただけですぅ～」
「・・・」
「いや～ん、疑わんとってください」
「無理だな」
「ひーぃ」

こんな、どうでもいい会話が昨日までは出来なかった。
新たな隊長が就任して数時間だが、色々な所で変化があった。　何よりも副隊長に余裕が出来たようだ。
こんな短時間で何も変わっていないと云えば嘘になると云うものだ。

「どうしたんだ？」
「あ、これです」

自分がここに来た理由をすっかり忘れてしまっていた。
副隊長の傍で片膝をつき、手に持っていた書類を手渡す。

「これに隊長印が要るらしいです。　今まで、こんな書類にも隊長印って要りましたっけ？」
「必要だったが隊長が不在だったからな。　適当に誤魔化していただけだ。」
「そうだったんですか・・　隊長？」

ここで、隊長が副隊長にもたれて寝ているのに気がついた。
こんな事を言うのは失礼になるが、寝顔がとても愛らしい。
思わず笑みがこぼれる。

「なんか、こういう光景もいいですね。　他隊じゃ絶対にあり得ないでしょ」
「そうだな・・・。」

すると隊長の目がパチっと開く。　起きてしまった。
目をこする隊長の姿が、私と副隊長の視線を捕えて離さない。
そんな2人の視線に隊長は不思議そうに聞いてきた。

「・・・どうしたの？」
「ここに隊長印が欲しいんですけど…。」

隊長が副隊長の肩に自身の頭を預けたまま言うのに、私が答える。
まだ眠たそうだ。

「もうお休みになられなくても大丈夫ですか？」
「隊長印ってどこにあるの？」

副隊長はそんな隊長の事はを全く気にしていない様子で、肩の隊長の方に目線だけやる。

「さっき、総隊長から貰ってないんスか？」
「貰ってない」
「貰ってきてください」
「何それ。　なんか嫌だ」
「嫌だじゃないですよ。　これから必要な物なんスから」
「わかった。　行ってくる」

副隊長と会話をしている隊長の顔はどこか不安そうだ。
重たそうに頭を擡げる。

「どうしたんスか」
「いや」
「早く帰って来てくださいよ。　ここで待っているんで。　な、如月」

そう言って副隊長は私を見る。

「・・・はい。　いつまでも待ってるんで、ちゃっちゃと行って来てください」
「わかった。　行ってくる」

私がそう言うと、隊長は嬉しそうな顔になって瞬歩で去って行った。
さすが、九番隊の副隊長は何でもお見通しのようだ。

「すごいですね。　副隊長は」
「何がだ」
「無意識なんですか？　少しの表情の違いで、相手の不安要素を把握して払拭してしまわはるんやから」
「…無意識じゃねーよ。　その内、嫌でも分かるようになる」

「そんなん、私には無理ですよ。　副隊長みたいに繊細に出来ていないから・・・。」

あの夜から気になっていた事を、隊長が居ないうちに聞いてしまおう。

「そういえば副隊長、隊長を迎え入れようと決意した決め手は何だったんですか？」

「・・・・・何だろうな。　ただ、このままアイツを放っておいたら消えてなくなりそうだとは思った。」

それを聞いて、自然と私の口元が上がる。

九番隊の隊長と副隊長は本当に恋人同士の様だと思う。

「運命ですかねぇ～」

「それで片付けるのかよ」

「はい～♪　なんか、不思議な香りがするでしょ」

運命で片付けておこう。　不思議で終わらせておこう。

そうでないと危険な香りがしてくる。

まあ、それはそれで面白いのだが。

「・・・。　隊長が戻られたら俺は一休みする。　後は頼むぞ」

「わかりました。　皆は既に仮眠を取ったんで、ゆっくり休んでください。」

私は背筋を伸ばす。

「・・副隊長、」

「どうした、急に改まって」

確かに急やけど、改めてコレだけは言っとかへんとアカン。
「当然居なくなったりしないでくださいね。」
副隊長の表情が驚きに変わる。
まさか、こんな事を言われるとは思っていなかったのだろう。
「勿論、隊長がいると云う事は隊にとっては大切な事です。　しかし、檜佐木副隊長の存在なしに九番隊を語れませんから。」
「そうか」
「なんかなぁ～。　・・・隊長、おかえりなさいませ！」
いい時に隊長が戻って来られた。
会話を切るには、ちょうど良かった。
「総隊長はすっかり忘れていたらしいよ。　これをどうすればいいの？」
「此処と此処にお願いします。」
隊長が持つ隊首印は見慣れたもの。　以前と変わらぬ形だ。
そして、今気がついた。　隊長の指はまるで白魚の様。　細っ。
判を貰ったら、さっさと出て行こう。
副隊長が紙をおさえ、隊長の手によって判が押される。
「どうぞ」
「ありがとうございます。」
「如月、落とすんじゃねーぞ」
「大丈夫ですよ。　では行ってきます」

私は2人を見て言う。
なかなか良い雰囲気が此処にはある。　これからもっと良くなっていくだろう。

「いってらっしゃい」
「行って来い」
「失礼しました」

私は笑顔で隊首室を退出した。

こうして隊長と副隊長の2人に見送ってもらえる事
それが、私にとって何よりも幸せ
こんな事が、どの隊でも当たり前になってほしい

≪17≫ Un fin

選択する事は、終わらせる事
これからが本当の勝負の始まり　度量が試される時
頑張り過ぎないで行こう
肩の力を抜いて気楽に　前を見て、現実を見て

選択する事は、始まらせる事
終わりがあれば始まりがある　何事も繋がっている
まだ進めるんじゃないか
自ら限界を決めず　恐れずに、時には切り捨てて

九番隊、隊花の白芥子は忘却の花
それ意味は
忘れることを指すのではなく、忘れてはいけない事を指そう

決して止まりはしない時の中で
進んでいこう　あなたと永久(とわ)に

“姫の居場所”はここに

物語が、ここから再び始まる

Un fin　愛しさ故に　～El paradero de la princesa～

≪0≫ Un afterword（前書き）

やっと終わりました。　前作同様、もう一度読み直してみています。　意外と打ち間違いや変換ミスってあるものですね。

≪0≫ Un afterword
愛しさ故に ～姫の居場所～
初稿 改稿
12／01 ≪1≫ 悲愴
12／05 12／31 ≪2≫ 新たな始まり
12／05 12／31 ≪3≫ 鍵
12／07 12／31 ≪4≫ 誰
12／11 12／13 ≪5≫ 揃う
12／15 12／18 ≪6≫ 捜す
12／18 12／20 ≪7≫ 見つける
12／21 12／22 ≪8≫ 怖れ
12／24 12／29 ≪9≫ 涙
12／25 12／26 ≪10≫ 告白
12／26 12／27 ≪11≫ 挨拶
12／27 12／28 ≪12≫ お披露目
12／28 12／29 ≪13≫ 勘違い
12／28 12／29 ≪14≫ わからない
12／29 12／29 ≪15≫ 貴女だ
12／30 12／30 ≪16≫ 幸せ
12／31 ≪17≫ 終幕
12／31 ≪0≫ あとがき

文章書きはロマンチストでなければならない

≪0≫ Un afterword（後書き）

前作の続きでお送りいたしました。　シリーズにしていきたいと思っています。　実は次のも書き始めました（打ち始めました？）。もしよろしければ、次のを楽しみに待っていてください。

あと、どうでもいいですけど、“ひさぎ”を変換すると“檜詐欺”になります。　なんで？　うちが何かした？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2051p/

愛しさ故に　～El paradero de la princesa～

2011年10月7日23時15分発行